

目の前の子供を捉えよ

「あの子の発言をどう聞いたの?」「教師の都合のいいように捉え、あの子が言おうとしていることを正確に捉えていない。」「AとBの発言を同じような発言として教師は捉えたけれど、微妙な違いがあるのに気付いていない。」

校内研修の一環としての参観授業を終え、先輩教師から授業を見ていただく度にたくさんの指導をいただいたが、特に印象に残っていることは冒頭の「子供の発言を正しく聞き取っていない。」という指摘である。

併せて、「授業前は徹底して指導案作りに励め。しかし、授業が始まったら指導案は忘れろ、目の前の子供の発言をしっかりと聞け。」との指導をいただいたことも忘れられない。

先輩方のご教示を日々の実践に生かそうと、目標を掲げて授業に取り組んだ。

しかし、何度も同じ指摘を受けてしまう。教師としての力量等、原因は様々あるだろうが、振り返れば、どうも指導案に対する思い入れが大きく関係しているように思われた。

参観授業や研究授業ともなると教師は特に念入りに指導案作りに励む。

クラスの子供たちの考えを一人一人のノートからできるだけ詳細に捉え、絵画のデッサンを何本かの線で描くように、何通りかの授業案を構想する。そして、慎重に検討を重ね、最終的に一つの授業案に決定するというのが大体のパターンである。

全力を傾けて作り上げた指導案だからこそ、授業を進めるための大きな拠りどころとなるのだが、そこに落とし穴があった。生きた授業はなかなか指導案どおりにはいかないものである。思わぬ展開が生まれたり、話合いが対立して膠着状態になったりすることもある。

こんなとき、教師は動揺し、何とか指導案どおりの展開に戻そうとしたり、子供のノートに書かれた考えは確かこうだったはずだと右往左往したりもする。だが、結局はどうにもならない。すでに子供たちは指導案どおりではなくなっているのである。

今でも昨日のことのよう、「指導案に固執せず、目の前の子供をしっかりと捉えよ。」という言葉の重みを実感している。